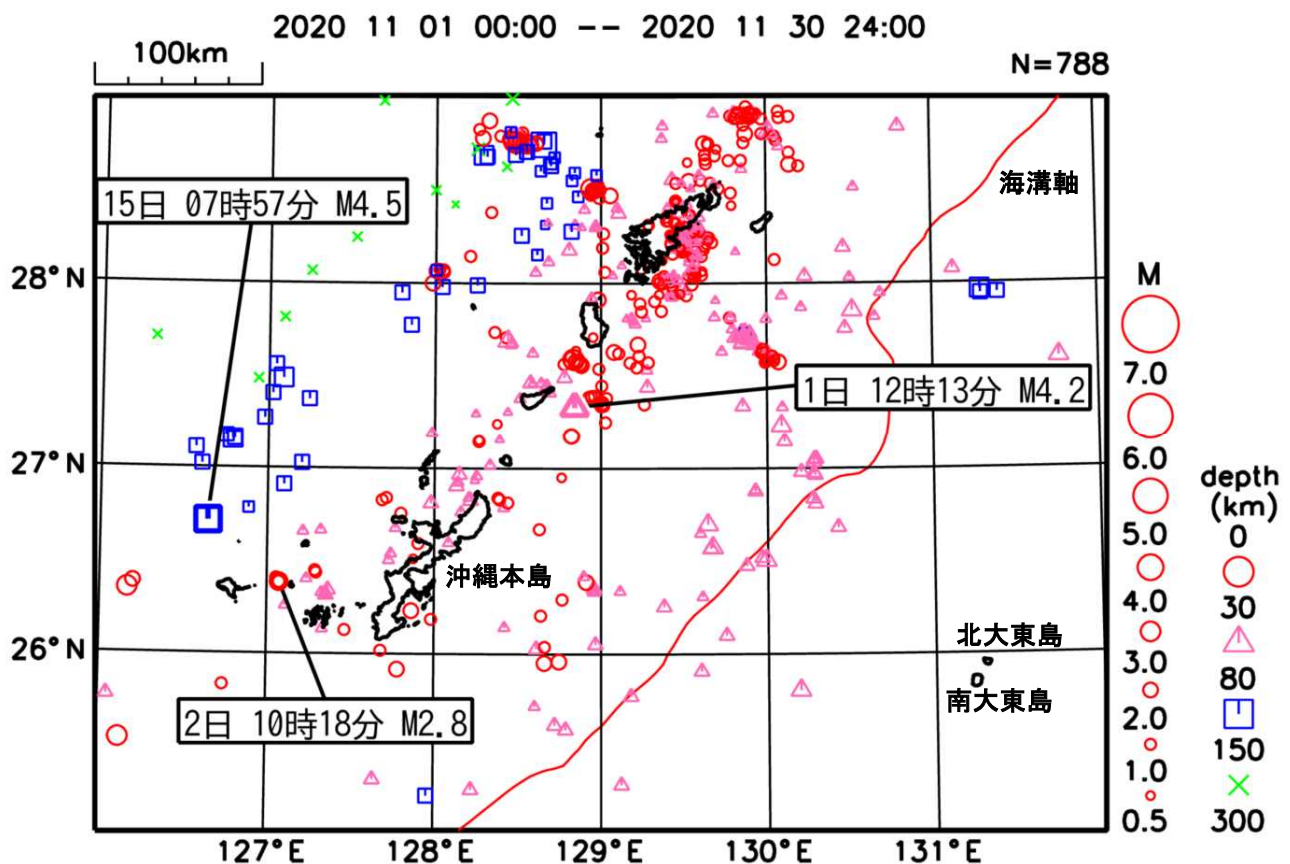


# 大東島地方の地震活動

2020年11月

南大東島地方気象台

## 震央分布図



図中の記号 M：マグニチュード depth：震源の深さ  
N：地震回数（マグニチュード0.5以上の回数です）  
沖繩県内で震度1以上を観測した場合は、吹き出しで示しています。

### [ 概 況 ]

今期間に、大東島地方で震度1以上を観測した地震はありませんでした（10月もなし）。  
なお、沖繩本島地方では3回観測しました（10月は1回）。

また、大東島地方周辺（上図の範囲）で観測した地震は788回（10月は559回）で、  
のうちM4.0以上の地震は4回（10月は1回）でした。

※沖繩地方（沖繩県）の地震については、沖繩気象台作成の「沖繩地方の地震活動」をご覧ください。  
URL：<https://www.data.jma.go.jp/okinawa/data/jishin/month.html>

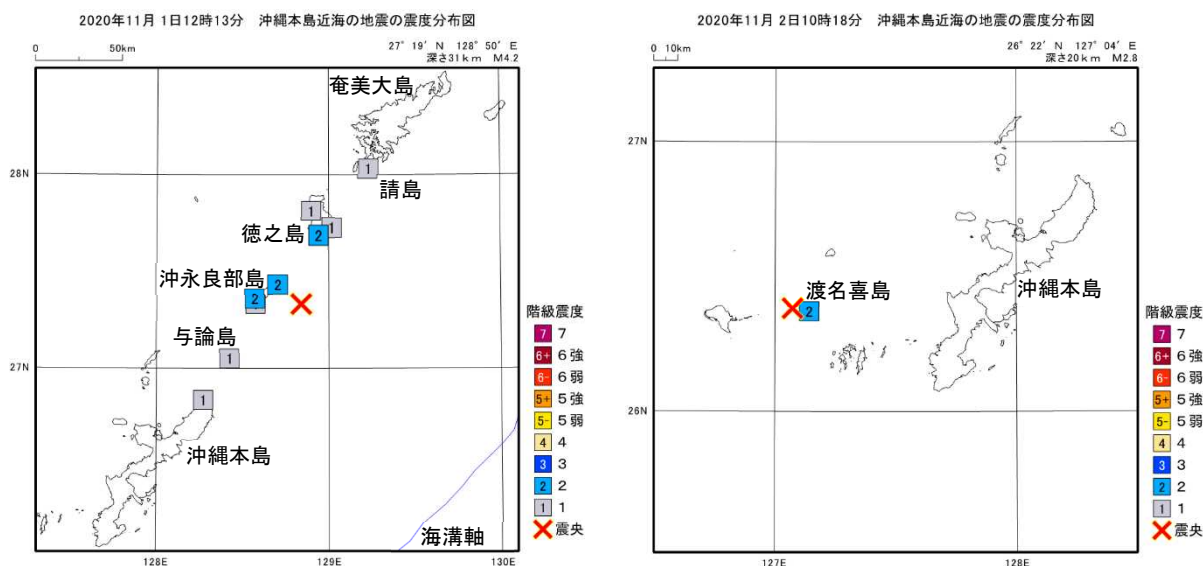
## 大東島地方及び沖縄本島地方で震度1以上を観測した地震の表（期間：2020年11月1日～30日）

震源時 各地の震度	震央地名	緯度	経度	深さ	規模
2020年11月01日12時13分 沖縄県 震度1：国頭村奥 鹿児島県 震度2：伊仙町伊仙*、和泊町国頭、知名町瀬利覚 震度1：瀬戸内町請島*、徳之島町亀津*、天城町平土野*、知名町知名*、与論町茶花*	沖縄本島近海	27° 19.9' N	128° 50.4' E	31km	M4.2
2020年11月02日10時18分 沖縄県 震度2：渡名喜村渡名喜*	沖縄本島近海	26° 22.9' N	127° 04.3' E	20km	M2.8
2020年11月15日07時57分 沖縄県 震度2：渡名喜村渡名喜* 震度1：名護市豊原、名護市港*、国頭村奥、国頭村辺土名*、今帰仁村仲宗根* 本部町役場*、恩納村恩納*、栗国村浜、沖縄市美里*、読谷村座喜味、中城村当間* 西原町与那城*、渡嘉敷村渡嘉敷*、座間味村座間味*、うるま市みどり町* うるま市石川石崎*、久米島町比嘉*	沖縄本島北西沖	26° 42.7' N	126° 38.6' E	104km	M4.5

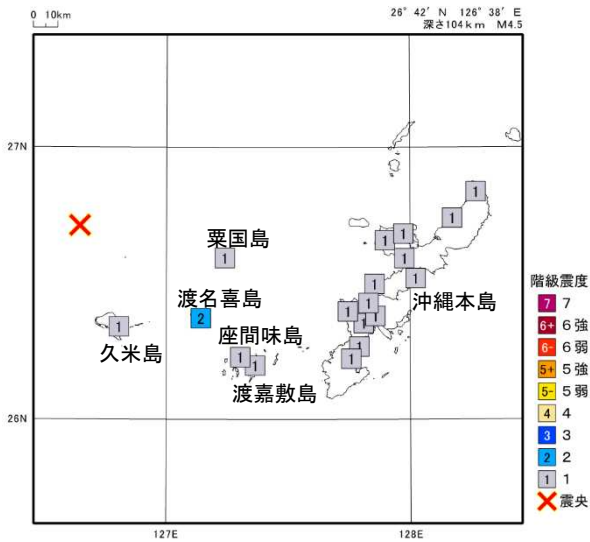
\*の付いた地点は気象庁以外の震度観測点です。

※大東島地方及び沖縄本島地方以外に震度が観測された場合は、その震度も記載します。

## 大東島地方及び沖縄本島地方で震度1以上を観測した地震の震度分布図



2020年11月15日07時57分 沖縄本島北西沖の地震の震度分布図



※資料中のデータについて

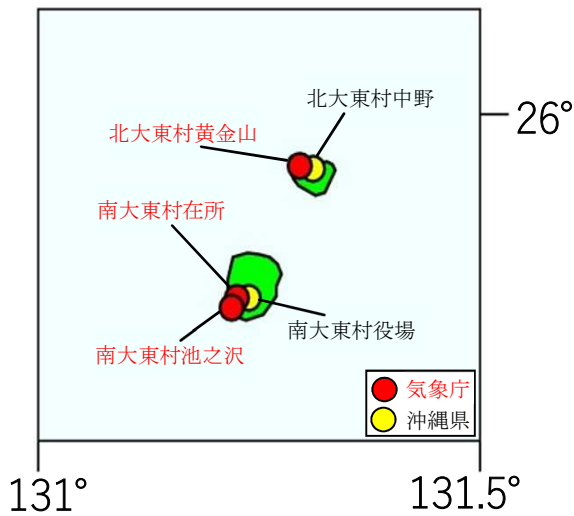
この資料は、国立研究開発法人防災科学技術研究所、北海道大学、弘前大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、高知大学、九州大学、鹿児島大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所、国土地理院、国立研究開発法人海洋研究開発機構、公益財団法人地震予知総合研究振興会、青森県、東京都、静岡県、神奈川県温泉地学研究所及び気象庁のデータを用いて作成しています。また、2016年熊本地震合同観測グループのオンライン臨時観測点（河原、熊野座）、米国大学間地震学研究連合（IRIS）の観測点（台北、玉峰、寧安橋、玉里、台東）のデータを用いて作成しています。

※概況中の震源の深さについて

震源の深さは、精度がやや劣るものは表記しないことがあります。

※データについては精査により、後日修正することがあります。

大東島地方の震度観測点




**気象庁 南大東島地方気象台**  
 Japan Meteorological Agency Minamidaitoujima Local Meteorological Office

本件に関するお問い合わせ先  
 電話：09802-2-2006  
 ホームページ：<https://www.data.jma.go.jp/daitou/>

# 震度について

## 震度はどうやって観測しているの？

震度は、地震による揺れを感知し自動的に震度を計算する「震度計」という機器で観測しています。地震が発生すると、全国に設置した震度計で観測された震度を気象庁に収集し、地震発生から約1分半後に、震度3以上の各地域の震度を速報でお知らせするほか、地震発生から約5分後には、震度1以上を観測した各地点の震度を観測地点名で発表します。

令和2年（2020年）10月29日現在では、気象庁、地方公共団体及び国立研究開発法人防災科学技術研究所をあわせて4,375地点で震度観測が行われています。



## 震度階級は？

気象庁の震度階級は、「震度0」「震度1」「震度2」「震度3」「震度4」「震度5弱」「震度5強」「震度6弱」「震度6強」「震度7」の10階級となっています。

## 震度計について

地面の揺れの強さの程度を示す指標である震度の観測は、明治17年（1884年）に内務省地理局により組織的に始められ、観測者の体感あるいは器物・建造物等周囲の状況から判断して、震度を決定（観測）する手法をとってきました。一方、国民の震度に対する関心や防災情報としての重要性の高まりから、震度の発表を速やかに行うため、気象庁では地震計により記録された加速度と周期及び震動の継続時間から震度を算出する方式を導入し、震度を観測する計器「震度計」を開発しました。

震度計は、設置した地盤の震動による加速度を電気信号に変換する計測部と、震度計全体の動作を制御するとともに計測部からの信号データを受け取って震度演算処理を行う処理部から構成されています（写真参照）。



処理部

計測部

気象庁では、震度計を平成3年（1991年）に世界に先駆けて導入しました。その後、平成7年（1995年）の阪神・淡路大震災の経験等から、震度観測の定義や震度階級の見直しを検討した結果、それまでは気象庁職員による体感でおこなっていた震度観測を平成8年（1996年）4月から全て震度計で実施するとともに、同年10月からは震度階級を震度0から震度7までの10階級（震度5及び震度6はそれぞれ5弱、5強及び6弱、6強に分割）としました。

気象庁では、地震発生直後に各地の震度計で観測された震度を地震情報として発表します。

各地の震度計は、地方公共団体における地震時の防災対応に必要な観測機器として「1市町村1観測点」を原則に整備されています。



地震・火山に関する情報は  
沖縄气象台ホームページまで

<https://www.data.jma.go.jp/okinawa/data/jishin/month.html>

沖縄气象台

検索

